文学部を卒業して

丹羽兌子

「歴史とは何だろう」「歴史を学ぶとは何だろう。」というや漠然とした思いから「歴史を学ぼう！」と意を決し選んだ専攻は「東洋史」でした。私が教養課程を終えて文学部へ進んだのは今から六十年ほど前でした。東洋史とはいえ、主任教授宇都宮清吉先生、助教授波多野善大先生、助手谷川道雄先生の教官はすべて中国史の研究者ですから、学生は当然ながら中国史を専攻することになります。

当時、名古屋大学は名古屋市内の各所に分散しており、文学部は名古屋城内にあった旧日本軍歩兵第六聯隊の兵舎を使っていました。冷暖房の設備は勿論なく、弱小の東洋史は火鉢で暖をとっていました。その後石炭ストーブが支給され少し寒さは改善されました。寒い環境でしたがそこで交わされた学問を追及する情熱は誠に熱く、初めて学問の場に加わった学生には目を見張る思いがありました。

中国学を目指す中国文学研究室と中国哲学研究室とも日常的に交流して、講義を聴かせていただいたり、議論をしたりすることもありました。中国文化に関する学識を、深く広く習得できる環境の中で研究の一歩を踏み出せたことは大変幸運なことでした。各学年の学生数は数名でしたので全てが少人数教育でした。

宇都宮先生は漢代の研究を専門にされてきて『漢代社会経済史研究』（弘文堂刊）という名著があります。社会経済史と表題にありますが、社会経済の構造を説くものではなく、その時代に人はどのように生きたかという視点を持って歴史を語られました。その後研究のテーマは六朝へうつり、『顔氏家訓』の研究に続きます。歴史という枠組の中で生きた人の営

名古屋大学東洋史研究報告　四十七号　二〇二三年三月発行

みを見つめることによって、歴史を解き明かすという視点は宇都宮史学の根幹だと思います。

波多野先生は中国近代史を専門とされ、実証的な手法で研究を進められました。先入観を持たないで史料と対峙して読み込むという仕事を積み重ねて、歴史の実態に迫る手法で『中国近代工業史の研究』（東洋史研究刊）などの業績を世に問われました。

谷川先生は歴史の流れをグローバルにとらえ、その中でそれぞれの文化の展開の様相を考察し独自の共同体論を構築されました。谷川先生はまた、京都大学の川勝義雄氏と共に名古屋大学と京都大学の中国中世史の研究者と研究者を目指す院生たちの学術交流の場として中国中世史研究会を立ち上げられました。この会は名古屋と京都で交互に催され、研究者も学生も発表者を囲んで忌憚ない熱い論戦をかわしました。この会から、中国中世史を担う多くの研究者が育ちますが、この研究会の最初の業績は『中国中世史研究』（東海大学出版会刊）です。ここには中国中世史研究会で交わされた学問に対する熱い情熱が息づいていると言っても過言ではないと思います。

私が兵舎跡の研究室へ足を踏み入れてから星霜を経て、キャンパスは不老町に移り、宇都宮先生、波多野先生は定年を迎えられ、谷川道雄先生と森正夫先生の体制になりました。私は学部を卒業し、大学院に進学させていただきました。宇都宮先生の指導を受け、卒論は曹操政権をテーマにし、修士論文は『世説新語』をテーマにしました。その後、助手を拝命し、一九七五年、一身上の都合により、退職し、文学部からも、東洋史学からも去ることとなりました。学部学生として歴史を夢中で学んだ日々、大学院生としてテーマを持って学問にのめり込んだ日々、研究室のスタッフの端くれとして生活した日々から研究室を去る日まで、約十五年、東洋史研究室において、学習と研究の場に身をおくことができました。文字通り先生たちの謦咳に接して学べたこと、研究者として学を究められる姿を後進の者たちに身をもって示されたことからいかに多くの物をいただいたか、齢八十になった今も、熱い思いで振り返ることができます。宇都宮先生は著書の跋文に、学者は敬語を使いあう俗流主義をやめようと提唱され「学者の論文は大家のであろうと、弱年（宇都宮先生の原文では若年、編集委員会注）の人のであろうと、全く対等のはずである。彼ら（かれら、原文）は論文を書くことによって社交をしているのではなく、真理を探究するガキにすぎない。

……と私は思うのである。」と書かれています。この一文は、宇都宮先生が研究者として貫かれた思いを端的に示すものであって、その精神が東洋史研究室の気風として受け継がれてきたと思います。古い人間の昔話ですが、研究室の歴史の一ページとして書かせていただきました。